

私立探偵

# 犬塚真太郎 前編

作/平野文鳥

イラスト/mimi



## 登場人物

---

■犬塚真太郎.....私立探偵。35歳。元コルロ警察署の刑事。10年前、ある事件の責任を取って辞職した。タフで心優しいこの物語の主人公。



■ミミー.....真太郎の秘書。24歳。真太郎の元上司レトリーバ刑事部長の娘。しっかりとした性格だが、お嬢様で育てられたせいか少し世間知らずなところあり。



■ドベール.....コルロタウンの裏世界組織の元幹部。現在は足を洗い堅気の金融業を営む。48歳。アンの父親。

■アン.....ドベールの娘。21歳。名門コルロ大学に通う女子大生。

■カレン.....バー『カレンの店』の女主人。年齢？ その知的で美しい風貌からは想像できない喧嘩の達人。

■ブラッキー.....コルロタウンで悪評高い暴走族のリーダー。18歳。

■シェパード.....コルロ市会議員。48歳。コルロ再開発事業推進派。

■レトリーバ.....コルロ警察署の刑事部長。50歳。ミミーの父親で真太郎の元上司。

## 第1話 ドベールの依頼

---

事務所のドアを激しく叩く音が響いた。

しかし、それはノックの音ではなく、あきらかに誰かがドアを蹴っている音だった。

「おい、真太郎、起きろっ！ いるんだろ！？」

いつものように客用のソファをベッド代わりにして寝ていた真太郎は、その野太い声で目を醒ました。

「だれだよ。せっかく美人のお姉さんとデートしている夢をみてたのに――」

腕時計を見た。午前8時を過ぎていた。真太郎は気だるく立ち上がると窓のブラインドを開け、まぶしく差し込む朝の光を手で避けながら窓から外を見下ろした。

「（ん？ あの路駐の車は――。やばい、ドベールだ）」

「はやく開けろ！ 蹴破るぞ！」

真太郎が慌ててドアを開けると、そこには髭面で強面の大男が立っていた。

――ドベール・コートマン。この男は、真太郎が以前住んでいたコルロタウンの裏世界をしきっていた組織の幹部だったが、わけあって足を洗い、今は堅気の金融業を生業としている。あくまで表向きにはだが。

「相変わらず朝に弱い奴だな」

「やあ、ドベール！ 久しぶりだな」

真太郎は握手をしようと右手を差し出したが、ドベールはそれを無視して事務所の中へずかずかと入って行った。そしてソファに腰を下ろしふんぞり返ると、上着のポケットから取り出したクシャクシャになった箱からタバコを一本抜き取り火をつけた。

「（いらついでるな）」

眉間にしわを寄せ、ため息のように鼻からゆっくりとタバコの煙をはきだすドベールを見て、彼が極度にナーバスな状態であることを察した真太郎は、慎重に言葉を選びながら話しかけた。

「残りの借金のことで来たのか？ 以前にも言ったが、一度に全部は返せないんだ。その事に関しては申し訳なく思っている。だから、月々わずかずつ返して誠意を見せているつもりなんだが」

ドベールはまだ吸いきらないタバコを灰皿で荒々しくもみ消しながら答えた。

「真太郎。おまえの腕を見込んで頼みたいことがある。きいてくれたら残りの借金を半分にしてやってもいい」

「えっ？」

またとない話に真太郎の心は踊った。だが、すぐにそれは不安へと変わっていった。なぜなら、金のためなら親でも売る守銭奴のドベールが、借金をまけてもいいと言う程の依頼が“まともな依頼”ではないという事を察するのは難しくなかったからだ。

「どうだ？ 真太郎」

真太郎は即答しなかった。

「おいっ！ 俺が短気でヤンチャなのはよく知ってるよな？」

「わかったよ。事務所をめちゃくちゃにされるのは御免だ。とりあえず内容を聞かせてくれ」

「――俺の娘の素行調査をしてほしい」

真太郎は我が耳を疑った。予想に反してあまりにも地味な依頼だったからだ。

「素行調査？ そんな地味な仕事で借金をまけてくれるのか？」

「てめえ！ 今、なんて言った？ 俺の娘の素行調査が地味だと？」

「い、いや！ そういう意味ではなくて――。すまん」

失言だった。どんな依頼だろうが仕事に差をつけてはいけない。プロにあるまじき発言だ。ドベールはそういうところに関しては厳しい男だ。当然、きついパンチの二、三発はとんでくるだろうと瞬間的に目をつぶった。しかし――、何も起こらなかった。目を開けるとそこには気の抜けたような表情でぼんやりと天井を見つめるドベールの姿があった。

「たしかに地味だよなあ――。凄腕のおまえにとっちゃガキの素行調査なんてつまんねえ仕事だろう。だが、これを頼めるのはおまえしかいねーんだ。――たのむ」

真太郎は驚いた。絶対他人には弱みを見せないあのドベールが、まるで別人のような弱気な態度を見せたからだ。

「（どうも、ワケありのようだな――。ちょっと興味がわいてきた）」

真太郎は答えた。

「わかった、ドベール。引き受けよう」

「ほんとうか！？ すまない」

ドベールはソファから勢いよく立ち上がると、笑みを浮かべながら真太郎の手を力をこめて握り締めた。

「ただ……」

「ただ、なんだ？」

ドベールは真太郎の不安げな目を見て握り締めた手の力を弱めた。

「ヤバイことに絡んでないだろうな？」

「ばかやろう。それが分かんねえからおまえに頼むんじゃねーか。娘の資料は後で部下に送らせる」

そう言うとドベールは事務所のドアを静かに閉めて出て行った。

「ドベールの娘か――」

真太郎はそう呟きながら窓際へ歩み寄り外を見た。

黒塗りのドベールの車が通りを走り去って行くのが見えた。

## 第2話 秘書のミミー

---

「真面目そうな顔をしてるんですね」

秘書のミミーはドベールの娘の写真を見ながら呟いた。

ミミーは1年前から真太郎の事務所で秘書として働いている。もともと真太郎は秘書には興味がなく、雇う気などなかった。それなのに彼女を雇っている理由は、真太郎の大先輩でミミーの父親でもあるコルロ署の刑事部長レトリーバに頼まれたからだ。

真太郎は今の探偵業につく前はコルロ署の刑事だった。その頃、彼はある事件の捜査中に犯人に殺されかけた事があった。それを救った命の恩人がレトリーバだ。その恩人から“俺のせいで世間知らずのお嬢様に育ってしまった娘に、世の中の事を教えてやってくれ”と頼まれては断るわけにもいかなかったのだ。

「アン・コートマン。年齢21歳。コルロ女子大で法学部に在学中——」

ソファァーにふんぞり返った真太郎が気だるい声で履歴を読み上げると、すかさずミミーが反応した。

「すご〜い！ コルロ女子大の法学部なんですか？ そこって法学部の中でもトップクラスですよ。アンってとても頭がいいんですね」

「ふ〜ん、そうなんだ。ドベールの娘がねえ。鳶が鷹を生んだってやつだな。ちょっと見せてくれ」

真太郎はミミーから写真を受け取るとアンの顔を目に焼き付けた。

キッチンでアイスコーヒーを作るミミーが真太郎に訊いた。

「“お母さん似”なんですかね？」

「アンが？」

「だって、あまりドベールさんに似てないから」

真太郎はミミーが持ってきたアイスコーヒーを飲みながら写真を見直した。

「（言われてみれば確かに似ていない。まるで赤の他人のようだ。いや、やはりミミーの言うとおり単に母親似なのかもしれない。まあ、どうでもいいか。今、そんな詮索をしても仕事には直接関係ないし）」

真太郎はソファァーから立ち上がり、デスクの上に放り投げていたコートを取った。

「お出かけですか？」

「コルロタウンへ行ってくる。アンの調査だ」

「あの——」

「何？」

「父が犬塚さんに忠告しておいてくれと」

「忠告？」

「ええ。なんでも、ずっと行方不明だった“ウルフ”がコルロタウンに戻ってきたという裏情報が入

ったので、くれぐれも調査には気をつけてくれと」

「えっ、あいつが!？」

封印していたはずの忌まわしい記憶が真太郎の頭の中ではじけた。

ウルフは10年前にコロタウンを恐怖のどん底に陥れた凶悪な「殺し屋」だった。出生、年齢不詳。すべてが謎につつまれた変装の名人で、狙った獲物は確実にしとめ、かつ、その残忍な殺し方には、さすがの裏世界のギャング連中でさえ震え上がった。

コロロ署はウルフを逮捕するために優秀な捜査チームを編成した。そしてそのチームはついにウルフを追い詰めることに成功した。ところが、ある新米の刑事がほんのわずかなミスを犯してしまった為に土壇場でまんまと逃げられ、それからウルフは完全に行方をくらませてしまった。

その捜査チームでミスをおかした刑事——それが昔の真太郎だった。

「大丈夫ですか？ 顔色が悪いですよ」

ミミーは心配そうに真太郎の顔を見つめた。

「そ、そうか？ 顔色が悪いのはたぶん二日酔いのせいだろう。忠告に感謝するとお父さんに伝えといてくれ。じゃあ行ってくる」

「あの——」

「まだ、何かあるの？」

「くれぐれも、お気をつけくださいね」

「おやおや、ずいぶんと心配してくれるなあ。そうか、ウルフのことが気になるんだな。それだったら大丈夫！ やばい場所へ行ったり危険なまねをしたりしないから。だって、今回の仕事でそんな事をしていたら採算が合わなくなるからね」

真太郎はそう答えると、コートを勢い良くはおり、お気に入りのソフト帽を深々とかぶって外へ出ようとした。するとミミーがまた真太郎を呼び止めた。

「あの——」

「何だい？ あのねえ、用があるのならまとめて言ってくれないか？」

「これを！」

ミミーは無邪気な顔で真太郎に“お守り”を渡した。

「初詣に行った時に買ったんです。“霊験あらたか”だそうですよ！」

「あ、ありがとう——」

真太郎は少し照れながら“お守り”を受け取ると、それをコートの内ポケットの中に大切そうにしまった。

「行ってくる！」

「お気をつけて」

真太郎はミミーに見送られて事務所を出た。

事務所があるテナントビルを出て通りに出た真太郎は、何気なく後ろを振り返った。ビルの2

階にある真太郎の小さな事務所の窓から、ニコニコしながら真太郎に向かって手を振り続けているミミーの姿が見えた。

「やれやれ——」

真太郎は右手を大きく振ってミミーに答えた。

### 第3話 張り込み

---

10年ぶりにコルロタウンに来た真太郎は、まるで遠い故郷へ帰ってきたような気持ちになった。——と、いってもコルロタウンは真太郎の事務所がある街から車で1時間程度の距離だ。その気になればいつでも行ける街なのだが、真太郎の忌まわしい過去の記憶がそれを拒んでいた。

駅前の商店街はすっかり様変わりしていた。真太郎が刑事時代によく通っていた駅前の安い定食屋は今なく、代わりに5階建てのテナントビルが建っていた。都会の新陳代謝は早い。思い出の場所なんかあっという間に消え去ってしまう。

真太郎は歩きながら、それでもまだ残っていた思い出の残骸を見つける度に、そこに10年前の自分が立っているような気がした。

「(なにセンチになってんだか——)」

ガラにもなく感傷的になった自分に気恥ずかしさを感じたのか、真太郎はそんな自分から逃げるように足を速めた。

駅前からしばらく歩くと、閑静な住宅地の中に建つコルロ女子大が見えた。歴史と名門を感じさせる石造りの正門の前で、育ちのよさそうな数人の女子大生達が談笑していた。真太郎が近づくとその女子大生達は声を潜め、まるで珍しいものでも見るかのような目つきで真太郎を観察した。

「(俺に気があるのかな？ そんなわけないか)」

不毛な妄想に自分で呆れ、苦笑しながら真太郎が大学内に入ろうとすると、しゃがれた野太い大声がそれをさえぎった。

「おい、君、君！」

いかにも警察官あがりの初老の警備員が真太郎に近づいてきた。

「ここからは同大学の学生と関係者以外は立ち入り禁止だ。許可はとっているのか？」

真太郎はその高圧的な物言いにカチンときたが、警備員ともめたところで何の徳があるわけでもない。とりあえず謝って正門の外へ出た。警備員はしばらくのあいだ真太郎を怪訝な顔で見っていたが、大学の講義の終了を告げる5時のチャイムが鳴り響くとさっさと正門横にある詰め所の中に引っ込んだ。

チャイムの音を聞きながら、真太郎は思った。

「(大学が終わった後のアンの行動を調べてほしいとドベールは言った。毎晩帰りが遅いのにその理由を絶対言わないアンのことが心配だからだそう。たしかに年頃の娘がそんな事をすればどんな親でも娘の行動を調べたくなるのは人情だろう。ただし、調べることで問題が解決する場合もあるが、逆に傷口が大きくなってしまう場合もある。——しかし、それは自分には関係のない事だ。自分はどんな調査結果がでようが、アンが夜に何をしていたかだけを調べればいい。それが今回の仕事だから)」

真太郎は正門から少し離れた場所にある電柱の影に隠れ、アンが出てくるのを待ち続けた。

しばらくすると講義を終えた女子大生達が正門から一斉に出てきた。真太郎はアンを見逃すまいと気を集中させ、女子大生一人一人をチェックし続けた。そして20分もすると出てくる女子大生の数も減り、そのうちほとんど出てこなくなった。

「変だな。見逃したかな？」

真太郎は引き続き正門を見張った。

腕時計の針が午後7時をさす。先ほどの高圧的な警備員が詰め所から出てきて、正門のゲートをガラガラと音をたてながら閉めた。

「裏門から出たのかな？ いずれにしてもこりゃ失敗だな」

結局、この日はアンを見つけることができなかった。

真太郎は張り込みを諦めて、駅の反対側にある酒場通りへ行くことにした。昔、常連だったバーに久しぶりに顔を出したくなったからだ。

酒場通りは10年前とさほど変わらず、所々につぶれた店や新しく開店した店があつたりはしたもの、全体的には昔のように“秩序ある雑然さ”を保っていた。真太郎は迷うことなく目的のバーを見つけた。

“カレンの店”と赤い文字で書かれたバーのドアを開けると、客のいないカウンターの椅子に、ショートカットの髪を金色に染め、黒いTシャツにジーンズ姿の細身の女が坐っていた。

「おひさしぶりです。カレンさん」

真太郎の声に振り向いた女は驚いて立ち上がった。

「真ちゃん？」

嬉しそうに微笑むカレンの顔は10年前と変わらず若々しく美しかった。

## 第4話 カレンの店

---

「キリシマだったよね？」

カレンは真太郎が店の常連時代に愛飲していた焼酎の銘柄を忘れていなかった。

カウンター奥の小さなキッチンの中へ入り、なにやら物色した後、白い紙で包装された一升瓶を大切そうに抱きかかえて出てきた。

「いつかこの店に帰って来てくれるだろうと思って、とっておいたんだよ。プレゼントだ、飲みな」

「おお！ 10年ものだね。ありがとう」

本来、この店のメニューには焼酎はない。ビールとシングルモルトウイスキーを嗜む客のために開いた店だからだ。それなのに焼酎が置いてあったのは、真太郎のことを気に入ったカレンが、実は無類の焼酎好きだった彼だけのために特別に仕入れていたからだ。つまり真太郎だけの特別メニューだったのだ。

真太郎はカレンが作ってくれたキリシマのオンザロックを、昔のように勢いよく喉に流し込んだ。いも焼酎独特の鼻につく香りと、ほんのわずかに喉につきさすような独特の辛味が、10年前の刑事時代の日々を思い出させた。

「仕事の方はどう？」

「いつも金欠だけど、とりあえず死なない程度の仕事にはありつけているよ」

「そう。安心した。あれから10年かあ——。真ちゃんも、ちょっとオヤジ入っちゃったね」

「カレンさんはぜんぜん変わらないね」

「人をオバケみたいに言わないでよ。真ちゃんだってその目の輝きは昔と変わってないくせに」

「それって、あいかわらずガキっぼいということ？」

「さあ、どうかな？」

カレンはいたずらっぼい目をしながら笑った。二人は懐かしさも手伝って、しばし昔話しに花を咲かせた。

しばらくすると店のドアが乱暴に開いた。人相の悪い大柄の男が、ズボンのポケットに両手をつっこみ、顎を上げ、相手を見下すような目つきで店の中を不満そうに見回しながら入ってきた。

「パツとしねえ店だな」

男はカウンターの椅子にドスンとわざと音をたてて威圧的に坐った。

「おい焼酎だ、焼酎もってこい！」

カレンは真太郎との会話を中断して立ち上がると、男の方へゆっくりと歩み寄った。

「わるいね。焼酎はおいてないんだよ」

「おまえが店のもんか？ ふざけんな、そこの野郎が飲んでるじゃねえか！」

「あれは、あのお客さんの持ち物で、店においてあるものじゃないんだ」

男は意に反して妙に落ち着いたカレンの態度に一瞬たじろいだが、再び大声で吠えかかった。

「ほお～！　ここは酒の持ち込みがOKなのか？　じゃあ今から酒屋に電話して酒とつまみをじゃんじゃん持ってこさせてもいいんだな？　仲間を呼んで宴会を開いても文句を言うなよ！」

真太郎の目つきがするどくなった。客という立場を利用して店に迷惑かける連中は最低だが、明らかに相手を脅すような嫌がらせをする連中には本能的に敵対心が働くのだ。真太郎は男を黙らせる為に立ち上がろうとした。しかし、それをカレンの手が制した。

「この客の迷惑だ。出て行っておくれ」

「なんだと、ばばあ！　俺は客じゃねえのか！？」

男は立ち上がり椅子を蹴り倒すとカレンにつかみかかろうとした。真太郎もすかさず立ち上がって彼女を守ろうとしたが、それよりも速くカレンは男が出した右腕を素早くつかみ、折れんばかりに捻じ曲げた。男は小さな悲鳴をあげた。

「だれに頼まれたか知らないが、ここの酒場通りでたちの悪い嫌がらせをする奴らは、あたいが許さないからな！」

カレンの膝蹴りが男の腹部にめりこんだ。

「グエツ」

「この前のぼや騒ぎもおまえらの仕業だろうが！」

息ができず前かがみになった男を、カレンは更に勢いよく蹴り上げた。男はスローモーションのように床にひっくり返るとそのまま動かなくなってしまった。

真太郎はカレンの見事な反撃にヒューと口笛を吹きながら倒れた男を覗き込んだ。

「1ラウンドKO負けって感じですね」

「こいつら、毎晩のように酒場通りの店という店に嫌がらせをしてるんだ。たまにはお灸をすえてあげないとね」

「店に嫌がらせ？　――もしかして“地上げ”絡み？」

「ああ。なんでも、街じゅうの古くて汚いエリアを一掃し、ついでに貧乏人も追い出して、エリートや金持ちだけが住む街にしようという計画が動き始めたらしいんだ」

「エリートや金持ちだけが住む街？　ずいぶん趣味が悪いね」

「弱い者いじめな計画だよ。考えている連中の面が見てみたいもんだ。――それはそれとして、ひと運動したら喉がかわいたよ。真ちゃん、キリシマを一杯おごってくれないか？」

「もちろん」

「あ、その前にゴミをかたづけなきゃ」

カレンは床にのびている男の襟首を片手でつかむと、そのままズルズルと出入り口まで引きずりドアを開けて荷物のように放り出した。

「（カレンさんに挑みかかるとは馬鹿な野郎だよ。彼女がギャング連中も一目おいた不良グループの元リーダーで、喧嘩の達人だったということを知らなかったんだろうな）」

真太郎は男を哀れみながら、氷が溶けて水っぽくなった焼酎のグラスに口をつけた。

## 第5話 居場所

---

カレンは真太郎が懐から取り出した写真を見て驚いた。

「この娘（こ）、アンじゃないか！」

「え、知ってるの？」

「ああ。昔、ドベールに紹介したことがあるんだ」

「ドベールに紹介って——アンってドベールの娘だろ？」

「そうか、知らなかったんだね。アンはドベールの養子で実の娘じゃないんだよ」

「詳しい話をきかせてくれる？」

真太郎は身を乗り出した。

「アンは、昔、暴走族に入ってたんだよ。彼女が15歳の頃かな。孤児で身寄りもなく世間からも相手にされず、結局、似たような連中が集まる族の中にしか自分の居場所を見つけられなかったんだろう。かわいそうな娘さ。もう一杯もらおうよ」

カレンは自分のグラスに焼酎をつぎたした。真太郎は彼女の少し寂しげな表情を見ながら、アの過去に自分の過去を重ね合わせているのかも知れないと思った。

「アンとはどこで知り合ったの？」

「彼女が敵対する族に襲われそうになったところを、たまたま出くわしたあたいが助けてやったのさ。彼女、本当に族なのかと思うほど礼儀正しく頭を下げて礼を言ってくれたよ」

「礼儀正しい族ねえ。一度、そんな連中の暴走（はしり）を見てみたいもんだ」

真太郎が言った軽い冗談を、カレンは聞き流した。

「そのあと、彼女、突然わんわんと泣きだしてね。族を辞めたい。でも行き場所がないのっ——。あたい、この娘をなんとかしてあげようと思って、それで、族の頭（あたま）に掛け合ってアンを辞めさせ、仕事の世話をしあげたんだよ」

「よく族を辞めさせられたね」

「真ちゃん、あたいを誰だと思ってたんだい？」

「もー、冗談だよ。ははは——」

真太郎の屈託のない笑いに、自分が少し“シリアス”なっていることに気づいたカレンは、それを誤魔化すかのように明るめの口調で話し始めた。

「アンってすごく頭のいい娘だったんだ。だったら、その能力を生かせるところがいいだろうと思って、ちょうど経理のバイトを探していたドベールにアンを紹介したのさ」

「なるほど。でも、それがなんでまた養子縁組に？」

「さあね。そこまで詳しくは知らないけど、ドベールも昔、アンと同じ孤児だったから、恵まれない彼女に憐憫（れんびん）の情がわいたのかもね。いずれにしてもアンにとっては幸せな結果に落ち着いたというわけさ」

「ふ～ん。あのドベールのおかげで、アンはやっと自分の居場所を見つけられたわけか」

「自分の居場所——。まあ、そうかもね」

カレンはピッチャーの氷が溶けてしまっているのに気づき、新しい氷を取りにゆこうと立ち

上がった。すると、店のドアが静かに開き、見るからに高級そうなスーツに身を包んだ長身の男が、落ち着いた足取りで入ってきた。

「こんばんは」

男は物静かな口調でカレンと真太郎にあいさつをし、遠慮気味にカウンターの1番端の椅子に腰を下ろした。店の薄暗い照明が男の背広の襟についているバッチに反射し鈍く光った。

「そんな隅っこに坐らなくてもいいのに」

常連客なのだろう。カレンはまるで遊びにきた友人に話すようにその男に言った。

「いらっしゃい。こんな早い時間に珍しいね」

「ああ、急に君の顔が見たくなってね」

「こんな顔でよかったら、いつでもどうぞ」

「マツカラム、もらえる？」

カレンが注文された酒を注いだショットグラスをカウンターに置くと、男はそれを落ち着きなく手に取って一気に飲み干した。

「なんかあったの？」

「まあ、議員をやっているといろいろあってね——。ここにくるとホッとするよ」

男は少し落ち着いたのか、そう微笑みながら言ったあと、フウと軽い安堵の息を吐いた。

「ねえ、ちょっと訊いていい？」

「なんだい？」

「コルロタウンの再開発の件なんだけど——」

カレンの質問が琴線に触れたのだろうか。男の顔から笑みが消え目尻がほんの少しつり上がった。

「すまないカレン、かんべんしてくれないか。今、僕はプライベートなんだよ」

「ごめんよ。野暮だったね」

一瞬、気まずい空気が店の中に流れた。真太郎はそれを吹き飛ばすかのように急に立ち上がった。

「じゃあ、カレンさん！ 僕はこの辺で」

「おや、もう帰るのかい？ もっとゆっくりしていけばいいのに」

「明日も仕事でコルロタウンに来るから、また寄るよ」

真太郎はカレンと男に軽く会釈をして店を出た。

外は閑散としていた。10年前なら仕事帰りのサラリーマンで活気に溢れ賑わっていたこの酒場通りも、不況の波には勝てなかったようだ。

真太郎は駅へ向かった。焼酎のほのかな酔いも手伝って足取り軽く歩いていると、ひとりの若い女とすれ違った。まるで待ち合わせの時間に遅れたかのように、女は酒場通りの奥に向かって足速で歩いていった。

「だいじょうぶかな。若いおねえさんがひとりでこんな場所を——」

突然、真太郎は歩みを止め素早く後ろを振り返った。そして、すれ違った女の顔を思い出し、

一気に酔いが醒めていくのを感じた。

すれ違った女――。それは、まぎれもなくアンだった。

## 第6話 希望の園

真太郎はアンの尾行を始めた。

アンは酒場通り奥の、さらに人気のない裏通りへと歩いて行った。

裏通りには小さな商店街があったが、よく見ると全ての店のシャッターには、まるで示し合わせた様に“移転のお知らせ”と書かれた白い紙が貼ってあり、闇の中に浮き上がるその一種異様な光景は、まるでホラー映画のワンシーンのようだった。若い娘が独りで歩くには十分に危険すぎる。真太郎は彼女に万が一の事がないように気を配りながら尾行を続けた。

しばらくして、アンは裏通りの終わりにある一件の建物の中へ入って行った。真太郎もその建物の入口まで歩いてゆき、暗めの門灯に浮かび上がる表札を確認した。

### 『希望の園』

名前から察するに何かの施設だろうか。真太郎はそう思いながら、怪しまれないように建物を観察した。老朽化した木造モルタル2階建の横に幼稚園のような小さな運動場があり、そこに錆び付いたブランコとシーソーが設置されていた。建物の入口付近には子供向けの使い古された自転車数台が整然と駐輪され、ブロック塀には子供の手によるものであろう、太陽に向かって手をのばす動物達の壁画がのびのびと描かれてあった。

「なにか、ご用ですか？」

真太郎の背後から声がした。驚いて振り向くと、そこには人の良さそうな顔をした初老の女が微笑みながら立っていた。真太郎は努めて平静を装った。

「いえ、ちょっと家を探していたもので」

「家をお探し？ ——ご住所はわかりますか？」

「あ、だいじょうぶです。ご親切にありがとうございます」

真太郎が初老の女に軽く会釈すると、彼女もまた真太郎に笑顔で会釈を返して施設の中へ入ろうとした。真太郎は、せつかくの聞き込みのチャンスを逃さない為に彼女を呼び止めた。

「失礼ですけど、こちらの方ですか？」

「えっ？ あ、はい。ここで園長をやっておりますが、なにか？」

「園長さんということは、ここは何かの施設なんですか？」

「そうです。“希望の園”といいまして、親がいない子供達の面倒をみております」

「なるほど。ここは児童養護施設だったんですね」

「ええ、民間ですが。細々とやっております」

その時、建物の玄関から若い女が顔を出した。アンだ。真太郎は素早く彼女に背を向けた。

「お母さん！ 子供達の汚れた服、今から洗濯しときますからね！」

「ありがとう。ほんとうにいつもすまないわね」

アンはにこりと笑うと建物の中に引っ込んだ。真太郎は、園長にアンに関する事を詳しく聞きだそうと試みた。

「娘さんですか？」

「娘？ ああ、彼女が私のことをお母さんと呼んだから？ ウフフフー。違うんです。ここでは私のことを皆、お母さんと呼ぶんですよ。あの娘（こ）はボランティアで来てくれている女子大生なんです」

「そうなんですか。しかし、ずいぶんお仲が良さそうですね」

「ええ、もちろん。だって、あの娘は昔ここに住んで――」

そう言いかけて、何故か園長は話しをやめてしまった。その表情は余計な事をしゃべりそうになった自分を戒めるかのようだった。

真太郎は園長が最後に言いかけた“あの娘は昔ここに住んで――”という言葉聞き逃さなかった。そして、カレンが言っていた“アンは孤児で身寄りのない娘だった”という話を思い出し、この施設はアンが子供時代を過ごした場所ではないかと思った。

「先ほどの女子大生さんは、毎晩こられるんですか？」

「――あの、失礼ですけど、なぜ、そんなにあの娘のことを？」

園長は真太郎の執拗な質問に眉をひそめた。

「い、いえ！ 今時、施設にボランティアにくる女子大生って珍しいなあと思って、ちょっと興味を持っただけです。エヘヘ――」

「そうでしたか。たしかに、おっしゃるとおり今時珍しい献身的な子だと思いますよ。毎晩のように無償で子供達の面倒を見てくれるのですから。人が雇えないので本当に助かっています」

「経営、大変なんですか？」

「ええ――。一応、市からは援助金をいただいておりますが、最近それも削減されまして。それに――」

「それに？」

「いえ、すみません。見ず知らずの方にこんな話をしても――」

園長は口ごもったが、かなり心が疲れているのだろうか。内心では話を聞いて欲しそうな目をしていて。人間観察が仕事のひとつである真太郎にとって、そんな彼女の本音を見抜くのは容易かった。真太郎は優しく話しかけた。

「よかったら、聞かせてください」

「実は――。そこ、見てもらえますか？」

園長はブロック塀の奥を指差した。薄暗い街灯にボンヤリと浮かび上がったそこには、大きな半円状のコゲ跡があった。それが何者かによる放火の跡であったことは誰の目から見ても明らかだった。

「ひどいでしょう？ 私たちがここを出て行かないことに対する嫌がらせなんですよ」

「嫌がらせ？ 地上げ屋ですか？」

「たぶん――。再開発の為にこの通りの皆さん全員が立ち退いたのに、私達だけがそれに応じなかったからでしょう。警察にも一応、相談はしているのですが――」

「失礼な質問だとは思いますが、なぜここから立ち退かれないのですか？ それなりの立ち退き料は支払われると思うのですが」

園長はしばらく沈黙し、真太郎にできるだけ自分の心情を伝えられそうな言葉を選んで口を開

けた。

「確かに、お金に関して面倒をみていただけるという話は聞いております。でも、立ち退かない——いえ、立ち退けない理由は、ここで家族のように生活をし、そして社会へ巣立って行った子供達の思い出の場所を、できるだけ残して置いてあげたかったんです。そして、いつでも帰って来られる故郷（ふるさと）の家にしておいてあげたいと——。でも、それって結局、私のわがままなのかもしれませんね——」

園長はうつむき、それ以上言葉を繋げなかった。真太郎は園長の答えにどう返してあげようかと一瞬考えたが、安っぽい慰めの言葉をかけるよりも、正直な自分の気持ちだけを伝えようと思った。

「——わがままなんかじゃありませんよ。お母さん」

真太郎の思わぬ優しい言葉に園長は顔を上げ、そして微笑んだ。

## 第7話 油断

---

次の日、真太郎はミミーに昨夜の出来事を話した。

「そうだったんですか——。アンって偉いなあ。これで、ドベールさんも一安心ですね」

「今夜、念の為にもう一度アンのことを調べに行くよ」

「え、念の為？ それってアンがまだ信じられないって事ですか？ ふーん」

「嫌な言い方するなよ。仕方ないじゃないか。だって、それが仕事なんだから。カレンさんと園長の証言だけを鵜呑みにしてドベールに報告なんかできないよ」

真太郎はミミーの冷たい視線をさえぎるように朝刊を広げ目を通した。

“将来を見据えた豊かな街へ！ コルロタウン再開発の意気込みを語るブルドック市長。”

真太郎はその見出しの下にある写真を見た。そこには下品な作り笑いを浮かべ自信満々に胸を張るブルドック市長と、市長の取り巻きのような卑屈な顔をした計画推進派の関係者達が写っていた。真太郎はハツとした。男達の中に昨夜カレンの店に来た常連客と同じ男がいたからだ。

真太郎は記事を熟読した。

“財政難に陥ったコルロタウンは、これからの豊かな福祉行政を図るためにも大幅な税収アップが必至となっている。その為に市長はコルロタウンを多くの資産家や大企業を誘致できる魅力的な街へと再開発してゆくことが、コルロタウンの将来へ繋がると考えている”——記事はそんな内容だった。

「（“これからの豊かな福祉行政を図るため”は市長の詭弁だな。本音は“既得権益のある連中がもっと住み易い街にしたいから資産家や大企業を呼ぶ。だから貧乏人は出て行け”だろう？ ブルドック市長さんよ）」

真太郎は、新聞を荒々しく閉じた。

夕方になり、コルロ女子大へ向かった真太郎は再びアンの素行調査を始めた。午後5時のチャイムがなり響くと、昨日と同じように門から女子大生の集団が出てきた。20分ぐらい観察していると、門からいそいそと出てくるアンを見つけることができた。真太郎はアンを尾行した。アンは駅前商店街まで歩いて行くと、ビルに挟まれた小さな花屋の中に入って行った。しばらくして、エプロン姿のアンが店頭に出てきて笑顔で花に水やりを始めた。

「（花屋でバイトもしていたのか）」

真太郎は働き者のアンに感心した。それからアンはそこで3時間程バイトをして店から出てきた。手にはバイト先からもらったと思しき、少し枯れかかった花束を持っていた。たぶん、施設のおみやげにでもするのだろう。アンは酒場通りの方へ向かって早足で歩き始めた。そして昨夜と同じように裏通りを通って“希望の園”の中へ入って行った。

「（もうこれ以上調べることもなさそうだ。明日、ドバールに報告するか。“あんたにや、もったいないくらい立派な娘だよ”って）」

仕事を終えた真太郎はカレンの店に寄って一杯ひっかけて帰ろうと思った。

裏通りから酒場通りへ戻ろうと人気のない通りを歩いていると、前方の暗闇の中に10人ぐらいの男達が立っていた。男達は真太郎の行く手を阻んだ。

「なんか用か？」

真太郎は落ち着いて男達に話しかけた。すると、その中から1人の男が真太郎にゆっくりと近づいてきた。頭を金髪に染め黒い皮ジャンを着たその男の顔は童顔で、どう見ても14、5歳の優しい少年にしか見えなかった。

「おっさん。なんで俺の女をつまわしてんだよ？」

「俺の女？」

「とぼけてんじゃねーぞ!？」

その甲高い声がまるで合図かのように、残りの男達が真太郎をぐるりと取り囲んだ。

「（こいつら族のガキどもだな。まったく、面倒くさいな）」

真太郎は仕事柄、この類の連中に絡まれる事には慣れていたので、襲われても対抗できる術は心得ていた。しかし、今ここで騒ぎを起こすのは賢明ではないと思い、とりあえずこの場を誤魔化そうとした。

「ああ、さっきの女性のことだね。違うんだ。実は僕は親御さんから頼まれた彼女のボディーガードなんだ」

「ボディーガード？ なら、なんで最後まで彼女を見守らねーんだよ？ なんで途中でスゴスゴと帰ろうとしてんだよ？ てめえ、ウソついてんじゃねーぞ!」

金髪の男は真太郎のコートの襟首をつかみ殴りかかろうとした。

「（しまった。もうちょっとましなウソをつけば良かった）」

真太郎は後悔しながら、殴りかかった金髪の男の右手を払いのけ、襟首をつかんでいる手を素早くはずして、そのままねじ上げた。

「痛っ！ 野郎一っ!」

金髪の男は真太郎に前蹴りをくり出した。腹に蹴りを諸に受け、後ろに倒れかけた真太郎を別の族の男が受け止め羽交い絞めにした。身動きがとれなくなった真太郎を金髪が再び殴りかかろうとしたが、真太郎はお返しとばかりに間髪いれず金髪のみぞおちに前蹴りを入れ、同時に羽交い絞めをしていた族の男のつま先を思い切り踏みつけた。金髪は「ウツ」と声を出し腹をおさえずくまり、羽交い絞めの男は痛みに耐え切れず手を緩めた。すかさず真太郎は羽交い絞めされた両手を抜き取り、男の腹を両手の肘で思い切り突き上げると、男は後ろへ勢いよく吹っ飛んだ。

真太郎の“場なれ”した素早い反撃に動揺したのか、残りの族の男達は後ずさり始めた。

「失せろ！ ガキども!」

真太郎が余裕で男達を威嚇したその時、後ろにいた別の男の飛び蹴りが真太郎の後頭部を直撃

した。真太郎は目の前が真っ暗になり、足の力がガクンと抜けていくのを感じた。そして地面に前向きに倒れた後、男達の執拗でヒステリックな蹴りが何度も体中に突き刺さるのを感じた。

「（やばい——）」

真太郎は薄れゆく意識の中で相手がガキだと思って油断した事を後悔した。

「あなたたち、何してるのっ！」

突然、甲高い大声がした。

「警察を呼びますよ！」

蹴りが止まった。そして複数の足音が慌ただしく遠退いてゆくのが地面を伝わって聞こえた。

「しっかりしてください！ 大丈夫ですか？」

「ブラッキーの仕業ね。ああ、どうしてあの子はこんな事ばかりするの——」

朦朧とした意識の中で聞いた声の主は、どうやらアンと園長のようなようだった。

「私、もう許せない！」

「行っちゃだめ！ アン！」

アンと思しき足音が、さっきの男達と同じ方向へ遠退いていった。

真太郎は気を失った——。

## 第8話 ゴミ掃除屋

---

人気のない高架線下の空き地に、ひと目で暴走族のそれとわかる改造されたバイクが20台近く並んでいた。その近くで族の男たちが円陣を作り、その中でアンと族の頭（あたま）の金髪の男が言い争いをしていた。

「ブラッキー。いつまであんな事を続けるつもりなの？ もういい加減にして！」

「なんだよ？ 用心棒に向かってそんな言い方ありかよ？ おまえと“あの家”を地上げ屋の悪党から守ってあげてんのによ」

「たしかに気持ちは嬉しいわ。でも、なんでも暴力で解決しようとするやり方は、あの連中となにも変わらないじゃない」

「なんだと？ あいつらと一緒にすんのか！？」

「一緒よ！ だって、どちらもお母さんを悲しませているじゃない！」

ブラッキーは、アンの“お母さん”という言葉にハツとし、口を閉ざした。

「ブラッキーお願い。もうやめて。こんな事いくら続けてもなにも解決しないわ」

「説教なんか聞きたかねえよ。俺は俺のやり方で“俺が育った家”を守るんだ。口ばっかりで何もしてくれねえ警察なんか、絶対信じられねえからな」

「でも——」

「なあ、アン。何故なんだ？ 何故、体を張っておまえや“あの家”を守ってる俺達を非難するんだ？」

アンはブラッキーの問いにしばし沈黙し、そして意を決した表情で答えた。

「うそよ！ あなたは“あの家”を守ってるフリをしてるだけだわ」

「な、なんだと？」

アンの予期せぬ答えにブラッキーの表情が変わった。

「そうすれば、今の自分を誤魔化せるから」

「誤魔化す？ どういう意味だ！」

「あなたが本気でお母さんや、あの家の子供たちのことを心配しているのなら、皆があなたに暴力を辞めて欲しい、族を辞めて欲しいと思っている事に気づくはずよ」

ブラッキーは首を横に振りアンから目を背けた。

「それが分かっているのに、族にしか居場所を見つけられない自分の弱さを誤魔化し正当化したいから“あの家”を守るフリをしているだけなのよ」

「う、うるせえ！」

凶星を突かれたのか？ ブラッキーはそう怒鳴った後、口を閉ざしてしまった。しかし、族の頭（あたま）の手前、仲間には動揺した姿を見せられないと思ったブラッキーは、開き直るように胸を張ってアンに言った。

「わかったよ——。そんなに俺のやり方が気に食わないのなら、用心棒から手を引くよ。これからはおまえらの好きなようにやればいい」

「ブラッキー」

会話が途切れた。高架線を走る夜の電車からこぼれた明かりがアンとブラッキーを照らし流れていった。

「悪いけど、俺はおまえのように人生の調子がちょっと良くなったぐらいで、突然ご立派な事を言い始める奴より、どんな事があっても態度を変えない族の仲間達の方を選ぶ」

ブラッキーはアンに背を向け、族の仲間たちを見回して言った。

「あばよ、アン。おまえは“あの家”からの心許せるダチだと思っていたけど、これでその関係も終わりだ」

「ブラッキー。――どうしてわかってくれないの？」

「失せろ！ はやく失せねえと、仲間がおまえに何をしでかしても知らねえからな！」

アンはこみあげてくる涙を止められず、ワッと泣きながらその場から走り去った。

ブラッキーはアンがいなくなった事を確認すると仲間達に大声で命じた。

「“希望の園”の用心棒は今夜で終わりだ！ 帰るぞ！」

仲間達は円陣を壊し、各々のバイクに乗り、エンジンの排気音を雷のように鳴り響かせながら空き地からぞろぞろと出始めた。と、その時、先頭に行くバイクのヘッドライトの中に1人男が浮かび上がった。よれよれのスーツ姿に、禿げたすだれ頭と貧相な顔の無精ひげ。見るからにうだつのあがらなそうなサラリーマン風の中年男がそこに立っていた。

「どけ、おやじ！ ひき殺すぞ！」

先頭のバイクに乗っていたスキンヘッドの男が中年男を大声で威嚇した。しかし、中年男はその場からどうもしなかった。

「てめえ」

スキンヘッドはバイクから降りて中年男に近づいた。

「なめてんのか？ こら」

すると中年男は、突然顔を引きつらせて笑い始めた。

「ヒヒヒヒ――」

「なんだ、こいつ。ざけんじゃねーぞ！」

スキンヘッドは中年男に殴りかかった。が、中年男はそれをボクサーのようなスウェーバックでサツとかわすと相手を馬鹿にするかのように、またヘラヘラと笑った。

「な、なめやがって！ 皆、このハゲを袋にしちまえ！」

スキンヘッドがそう言うと、中年男は「おまえがここの“あたま”か？」と、言いながら目にも止まらぬ速さで懐から何かを取り出しスキンヘッドの腹を突いた。スキンヘッドはその早業に一瞬何が起こったのか分からなかった。思わず腹を触ると指の間から生暖かいものが流れ出していた。血だった。スキンヘッドはへなへなとしやがみこんだ。

「ヒヒヒヒ――」

中年男は血のついたバタフライナイフを手首を使って軽やかに回した後、それをペロリと舐めた。

「あ、あいつ、やばいぞ」

族のひとりが怯えた声でつぶやいた。

「ひるんでんじゃねえー！ 皆、やっちまえーっ！」

ブラッキーが怖気つく仲間たちに気合を入れるかのような大声を出すと、全員がそれぞれの手製の武器を手にとって一斉に中年男に襲い掛かった。中年男は、最初に襲い掛かってきた男が振り下ろした金属バットをさっと避けると、ナイフで男の太ももを斬りつけ、ほぼ同時に襲い掛かってきた別の男の腕にも斬りつけた。まるで舞踏でも演じているかのような無駄のない素早い男の攻撃に、本能的に危険を感じた全員が一斉に中年男から離れた。

「て、てめえ、なにもんだっ！？ マジで死にてえのかっ！」

ブラッキーはありったけの大声を出して中年男を威嚇しようとした。しかし、意に反してその声は情けなく裏返っていた。

「ゴミ掃除に来た」

「ゴ、ゴミ掃除？」

「どうやらおまえが本当の“あたま”のようだな。ヒヒヒヒ——」

中年男はそう言い終わるやいなや、目をカッと見開きブラッキーめがけて突進した。ブラッキーは男が真っ直ぐに突き出したナイフを避けようと素早く右へ身をかわした。——つもりだった

。

「えっ？」

ブラッキーは鋭い痛みを感じた。中年男のナイフがブラッキーの左の上腕に突き刺さっていた。間髪入れず中年男は別のナイフを懐から取り出し次の攻撃態勢をとった。

「（た、助けて——）」

ブラッキーは、鮫のような感情のない中年男の目を見て、生まれて初めて死の恐怖に怯えた。

## 第9話 姉弟（きょうだい）

---

コルロ総合病院の玄関横に駐車しているパトカーの後部座席で、真太郎は厳格そうな顔をした年配の刑事から事情徴収を受けていた。

刑事は真太郎の報告をメモに書きとめ、再度、口頭で確認をとった。

「――で、児童養護施設“希望の園”の園長に介抱された後、アンという女性を探しに行った。そして、その途中でナイフを持った中年男が暴走族のリーダーを襲おうとしているところに遭遇した」

「ええ」

「それで、機転を利かせて“警察だ！”と大声で叫んだら中年男が慌てて逃げ出したので追いかけたが見失ってしまった――と。間違いないな？」

「“間違いないな”って、俺がウソをつくとも思ってるんですか？」

「まあ、そう怒るなよ、真太郎。仕事だから仕方ねーだろ？」

そう言いながら固い表情を急に和らげたその刑事は、真太郎の昔の上司で、ミミーの父親でもあるレトリーバ刑事部長だった。

「部長、金髪の男は？」

真太郎は心配そうな表情で病院の方を見ながらレトリーバに訊いた。

「ああ、ブラッキーか。腕に怪我を負ったが、おまえさんのおかげで大事には到らなかったようだ」

「よかった――。ところで、部長。族のいざこざぐらいであなたが出て来られるとは、ちょっと大げさじゃないですか？」

「出たんだよ」

「え、何がです？ ――幽霊？」

「アホか。ウルフだよ」

ウルフ――。真太郎の刑事生命を奪った殺し屋。真太郎は再び甦ったその忌まわしい記憶を忘れようと思わず頭を振った。

「ブラッキーの証言から察するに、族の連中を襲った中年男。ありゃあ、間違いなくウルフだな」

「でも、プロの殺し屋が、なんでまた族のガキどもなんかを襲ったりするんですか？」

「わからん。ブラッキーが言うには、ウルフは“ゴミ掃除に来た”と意味不明なことを言っていたらしい」

「ゴミ掃除？」

「たぶん、邪魔な連中を消しに来たという意味だろう」

「あの族たちが邪魔？ あいつら何をしでかしたんでしょうね――」

「それはこれから調べればわかるだろう。いずれにしても、真太郎、もうこれ以上あの辺りに近づくな。危険だ」

「おや、心配してくれるんですか？ 優しいですね」

「おまえの身になにかがあったら、娘が泣く」

「え？」

「出る」

レトリーバは気まずそうな咳払いをして、車のドアを開け真太郎を開放した。

コルロ総合病院内。ブラッキーの病室――。

左の上腕部に包帯をまいたブラッキーは、窓際の椅子に座って外の景色をぼんやりと眺めていた。警察の執拗な質問にウンザリしたのだろう。その顔は、まるで親に叱られた小学生のようにふてくされていた。

見舞いに来たアンが優しく声をかけた。

「痛む？」

「ぜんぜん」

「あの男性（ひと）、探偵さんなんだって」

「探偵？ だれのことだ？」

「あなたを助けてくれた――」

「あいつ、探偵だったのか」

ブラッキーは、あの男がケチな探偵なわりには、並外れた度胸と腕っ節の強さがあった事を思い出して少し驚いた。と、同時にその探偵がアンを尾行していた事も思い出し、それをアンにばらしてやろうと思った。でも、自分の命を救ってくれた義理ぐらいはたててやるかと思い直し、それをやめた。

アンはブラッキーに何か気が紛れるような話をしようと思った。しかし、この場の空気にふさわしい気の利いた話題が見つけれなかった。

二人の間に沈黙が流れた――。

病室の壁にかけられた時計の針が、その沈黙の時をひときわ大きな音で刻んでゆくのが聞こえた。ブラッキーは外の景色を見るのをやめ、アンの方へ振り向いた。

「怪我した仲間？」

「命に別状はなかったらしいわ」

「そうか――。で、他の仲間達は？ だれか見舞いにきてねーのか？」

アンは、ブラッキーの質問に正直に答えていいものかどうか迷った。

「なに黙ってんだよ？」

「――だれも、来てないわ」

「え？」

「刑事さんに訊いたら、皆、逃げてしまったらしいの」

「逃げた？ ウソつけ！」

ブラッキーは動揺した。

「ウソじゃないわ。刑事さんが“ブラッキーを襲った犯人はプロだ。何か心当たりはないか？”って皆に訊いたら、俺達はブラッキーとはもう関係ない、関わらない、と言って逃げてしまったんですって——」

「な、なんだよ、それ。もう関係ない？ 関わらない？ “あたま”が怪我を負ったというのに？ ——ざけんなっ！」

激昂したブラッキーは勢い良く立ち上がり、横に置いてあったゴミ箱を思いっきり蹴飛ばした。そして興奮しながらしばらく肩で息をしていたが、興奮が収まると急にうなだれて、視点の定まらない目で床を見つめながら呟いた。

「俺達は信じあえる仲間じゃなかったのかよ——」

ブラッキーはアンに背を向けた。悔しさと悲しさに歪んだ情けない表情をアンに見られたくなかったからだ。

「ねえ、ブラッキー」

ブラッキーは答えなかった。

「仲間を恨まないで。皆、怖くなって自分を守ろうと必死だったのよ」

「あいつら、絶対許さねえ——」

「やめて」

「なんだよ。また、俺に説教するつもりか？」

「もう、わかったでしょ。 あそこは、あなたの本当の居場所じゃなかったのよ」

「うるせえ」

「ねえ、探しに行こうよ。あなたが望む、あなたに本当にふさわしい場所を。きっと見つけれられるわ。世の中って私たちが思っている以上に広いから——」

「うるせえって言うてるだろうが！ 出て行け——！」

ブラッキーは病院中に響き渡るような大声でアンを怒鳴った。

アンは話すのをやめ、うなだれながら病室のドアまでとぼとぼと歩いた。

「私、あなたのこと信じているし、いつでも応援しているからね。だって、同じ“あの家”で育った姉弟（きょうだい）だから——」

そう言うと、アンはドアを静かに閉めて病室から出て行った。

「ふん。なにが姉弟（きょうだい）だ」

ブラッキーはアンが出て行ったドアに背を向け、吐き捨てるように呟いた。

しばらくして、ブラッキーの肩が小刻みに震え始めた。

ブラッキーは泣いていた——。

## 第10話 ドベールの秘密

---

カレンの店の壁掛け時計が午後7時を示していた。

カウンターの椅子に坐ったドベールは、真太郎からアンの素行調査のレポートを渡された。

「そうだったのか。アンはバイトとボランティアをしていただけなのか」

ドベールは安堵の表情を見せながらレポートに目を通し始めた。しかし、そこに書かれてあった施設名に目が行った瞬間、表情は驚きのそれに一変した。

「希望の園——」

真太郎が説明をした。

「そこはアンが育った児童養護施設だ。裏も取ってる。あんた知ってるだろ？」

「どういう意味だ？」

ドベールは、レポートから目を離し真太郎を睨みつけた。

「養子だそうだな。アンは」

「誰に聞いた？」

そう言うとドベールはカウンターの中にいたカレンの方に目をやった。

「別に隠す必要もないだろ？」

カレンがグラスを拭きながら微笑んで言った。

「ちっ、ベラベラしゃべりやがって——」

ドベールは不愉快そう表情で再びレポートに目を通し始めた。

「で、アンはどんな様子だった？」

「献身的に施設の手伝いをしていたよ。園長にとっても感謝されていた」

「そうか——」

強面のドベールの目が細まり、優しい輝きを見せた。

「ただ、あの施設にはちょっと面倒なことが——」

「面倒なこと？」

ドベールはレポートのページをめくる手を止め、身を乗り出した。

「園長から聞いた話のだが、最近、地上げ屋の嫌がらせがひどくて困っているらしい」

「なにっ？」

ドベールの目が険しくなり眉間に皺がよった。

「おや、知らなかったのかい？ その施設だけじゃなく、この界限は連中の嫌がらせがひどいんだよ。市の再開発に絡んでるらしいんだけどね」

カレンはドベールに状況を詳しく説明した。それを聞いたドベールは落ち着かない様子で手元にあったグラスをつかみ、中のウイスキーを一気に喉に流し込んだ。

その時、店のドアが乱暴に開き、目つきの悪い3人の男達が肩を揺らしながら入ってきた。先頭には先日カレンにコテンパンにされた人相の悪い大柄の男がいた。

「あんた、懲りないねえ。今度はお友だちを連れての御来店かい？」

カレンは呆れた顔で言った。

「けっ！　それが客に対するもの言いか」

「前も言っただろ。チンピラの地上げ屋なんか、客とは思ってないよ」

「じゃあ、思わせてやるぜ。嫌というほどな」

男はニヤリと笑うと、後ろの2人の男達に首を振って合図をした。2人は顎を上げ、余裕の表情で指の骨をポキポキと鳴らしながらカウンターの方へ近づいて行った。どうやら大柄の男より少しは腕に覚えがあるらしい。真太郎は立ち上がり身構えた。

ところが、2人はカウンターに坐っているドベールの顔をみた途端、急にその足を停めてしまった。

「おい、なにやってんだ？　あっ！」

大柄の男もカウンターのドベールに気づくと急に落ち着きをなくした。

「帰るぞ！」

大柄の男はそう2人に命じると、3人一緒にさっさと店から出て行ってしまった。

「おやおや、どうしたんだろうね？　あいつら」

地上げ屋3人の不可解な行動に啞然としているカレンをよそに、ドベールは何事もなかったように真太郎に礼を言い始めた。

「世話になったな、真太郎。これで俺も気が楽になった。約束どおり残りの借金は半分にしてやる。カレン、真太郎にボトルを入れてやってくれ。とびっきりウマイやつをな。もちろん俺のおごりだ」

ドベールは勘定をカウンターの上に置いた。そして、ゆっくりと立ち上がり店のドアの方へ向かって歩き始めた。

「ドベール」

真太郎の声に、ドベールは足を止め振り返った。

「な、なんだ？」

ドベールは何故か動揺しながら答えた。

「前から気になっていたんだが、なぜ今回の仕事を俺に頼んだ？　他にも腕が立つ探偵はたくさんいるだろう？」

ドベールは、ちょっと間をあけて答えた。

「なんだ、そういうことか。そりゃ、おめえが1番汚れてねーからだよ」

「はあ？」

きょとんとする真太郎の顔が滑稽だったのか、ドベールは苦笑しながら店を出て行った。

カレンの店を出たドベールは、車を停めていた近くの地下駐車場へ急ぎ足で向かった。そして駐車場に着くと周りを見回して誰もいないことを確認し、懐から携帯電話を取り出して通話ボタンを押した。呼び出し音が6回なって相手が出た。

「(はい)」

「もしもし、俺だ。ドベールだ」

「(おまえか。すまん、今たてこんでいるから手短に頼む)」

近くに誰がいるのだろうか？ 電話の相手はささやくような声で答えた。

「てめえ、約束が違うぞ！」

「(何だ？ いきなり)」

「とぼけるな！ “希望の園”だ。あそこには絶対手を出さないという約束だっただろうが！」

「(何のことだ。俺は知らないぞ。指示した覚えはない)」

「ちっ、電話じゃ話にならん。今から俺がそっちへ向かう。何処にいる？」

「(待て！ ここはまずい。わかった。じゃあ、今夜の12時、クラブ“チワワ”で会おう。詳しいことはその時に――)」

電話の相手はそうドベールに指示すると一方的に電話をきった。ドベールは携帯電話を睨みつけながら怒鳴った。

「ふざけやがって、シェパードめ！」

誰もいない静かな地下駐車場の中で、その声が大きく反響した。

ドベールは車に乗り込みエンジンをかけると、荒々しいハンドルさばきで車のタイヤを軋ませながら猛スピードで地下駐車場を出て行った。

(後編へ続く) <http://p.booklog.jp/book/43540>



私立探偵 犬塚真太郎～前編

<http://p.booklog.jp/book/41809>

著者：平野文鳥

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/hiranobuncho/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/41809>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/41809>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.